

2005 年度生態史プロジェクト報告書

## モノと情報班

### 『生きられた歴史と居住空間 北ラオスのタイ・ルー村落からの報告 』

清水郁郎（大同工業大学建築学科）

キーワード：戦争、社会主義、居住空間、歴史、タイ・ルー

調査期間と場所：ポンサリー県ブン・ヌア郡ンガイ・ヌア村、2005 年 8 月 17 日～ 9 月 1 日

History lived by an individual and Living Space: Report from Tai Lue village of northern Laos.

Ikuro SHIMIZU, Associate professor, Daido Institute of Technology

Keywords: war, socialism, living space, history, Tai Lue

Research site and period<sup>1</sup>: 17th August, 2005-3rd September, 2005 at Ngai Neua village, Boon Neua district, Phong Sali province.

## 要旨

このレポートは、ブン・ヌア郡（ポンサリー県）のタイ・ルーの村で、昨年行われた調査にもとづく。内容は、主に以下の 2 つの点に集中している。ひとつは、現在までの村落の歴史の概略であり、もうひとつは、個人または少数民族社会としての村落が生態学的な環境を含む居住空間をどのように利活用しているかである。複雑な歴史的イベントと個人の経験を対象化する方法として、村人による語りを中心にしてこのレポートは記述されている。さらに、人びとが近年のいわゆる「周縁」的な状況の下で、国家や他の少数民族集団とどのように向き合ったかという問題を、「叛史」という概念でとらえようと試みている。

## 1. 正史と叛史

本報告は、2005 年 8 月から 9 月にかけておこなったポンサリー（Phong Sali）県ブン・ヌア（Boon Neua）郡のタイ・ルー（Tai Lue）の村落における調査にもとづいている。内容は、村落の特徴と現在までの歴史の概要、生態環境を含めた村落社会の居住空間を取り巻くさまざまな状況に、個人や集団がどのように対処したのかの 2 点である。記述の方法としては、村人の語りから以上の 2 点を描き出す。また、地理的、政治経済的に周縁における周縁といえるような状況において、人びとや集団が国家の力学や異集団との邂逅にどのように向き合ったのかを「叛史」の概念でとらえることを考慮する。さらに、これらのことを踏まえて、居住空間の動態について若干の考察をおこなう。

ここでいう叛史とは、豊浦志朗による概念を援用している。正史は、一般的に教科書に書かれた歴史だが、豊浦によれば、正史のなかでは（勝者の）力学（リアリズム）の縦軸、倫理主義（モラリズム）の横軸によって固定化されたひとつの座標軸（イデオロギー）のなかでの発想を強いられる [豊浦 1989: 9]。また、正史の版元とは権力総体にほかならず、権力の複雑多岐な諸関係は正史の座標軸にしたがって整理されていく [ibid. : 10]。いっぽう叛史とは、正史の対極にある概念であり、正史の座標軸を破壊するものである [ibid. 11]。豊浦のこうした定義の背景には、正史とそれを表象する諸事象の文字通りの破壊を実現するために人びとが使う暴力的手段、すなわち武装蜂起のような行為が想定されている。こうした点から、叛史の概念をそのまま本報告の当該地域に適用するのは、史実のうえからも困難である。ただし、筆者は、ある地域や社会の歴史を知るうえでだれのための歴史なのかをつねに考えていくべきであり、そのためには叛史の概念は有用であると思える。本報告もその一部をなすプロジェクト研究全体は、生態環境と人びとの関係の歴史の変遷への視座を持つことにくわえて、メコ

ン川流域という、人びとの織り成す諸関係があまりにも複雑な地域を扱うからである。

本報告では、豊浦の定義を尊重しながらも、叛史の概念を個々人が生きた、個々人の側からの歴史と、そのなかに見え隠れする、強大なものに易々と従属しないためのなんらかの微細なきざしといった程度の広い意味でとらえる。人びとに対峙する国家や異集団は強大ではあるけれど、暴力の手段によらず、違ったかたちをとりながら、人びとはそうしたものに忍従するばかりではないことを示したい。

そこで、タイ・ルーの村落社会において、過去においてどのような事件があったのか、それは国家としてのラオスが体験した事件とどのように関連し、また受け取り方にどのような差異があるのかに着目する。具体的には、村落史における重要な出来事である戦争体験、村落で重要な「聖なる森」に対する国家からのアプローチ、共同農業システムの導入と放棄について記述する。とくに後二者では、どのようなかたちで人びとは国家と関係したのかを中心に記述をすすめていく。そして、国家や異集団との距離感を人びとがかなり苦労しながらも自分たちなりのやりかたで調整してきたことを人びとの語りから示し、あわせて正史とは異なる歴史を生きた人びとの生活実践について考える道筋を示したい。

## 2. 調査地の概要

現地調査は、ポンサリー県のブン・ヌア郡にあるンガイ・ヌア (Ngai Neua) 村でおこなった。ポンサリー市街から 40 キロほど手前にあるタイ・ルーのブン・ヌア郡で、ポンサリーに向かう道と分枝し、ウー・タイ (Ou Tai) ウー・ヌア (Ou Neua) ウー・ニョット (Ou Nyot) などのタイ・ルーの村や中国国境に向かうルートに沿って北上したところにこの村はある (図 1 参照)。

同村の人口は 868、戸数は 142 である。また、集団の構成については、ルーが 133 世帯、ホー (Haw) が 9 世帯住んでいる。ただし、これらホーは土地を所有しているわけではない。ルーの村人によれば、近郊または中国領内から移住してきたホーの一群は、この村に定住するわけではないし、ルーもまたそれを望んではいない。他所への移住の途上であり、一時的にタイ・ルーは土地を貸しているに過ぎないというわけである。

この村は、タイ・ルーのほかの村の例に漏れず、仏教寺院を中心に組織されており<sup>2</sup>、また仏教は、村人の生活の中心にある。村をぐるりと巻くように、ンガイ川が流れている。ンガイ川の川べりにも、現在では村人の住居が建てられている。同村は、川と水田、それに後述する村落の後背地にある守護森林に囲まれており、慢性的に土地が不足している。人口圧により、居住地が川の水際まで近づいているのである。

生業は農業が主で、村落の周辺でもち米の水田耕作をしている。また、自給用の各種野菜をつくっているが、近年では、ケシ栽培を根絶しようとする国連により、ヴェトナム産のトウモロコシなどが配布されているという。この導入にあたっては、政府が買い付けを保証する手はずとなっており、調査時点では、その買い付けを待っている状態だった<sup>3</sup>。

村落の政治集団としては、ラオス政府の行政の末端に位置する村長、副村長などの役職がいる。それらにくわえて、この村にはかつてターセンと呼ばれる存在がいた。このターセンはすでに現存しないが、もともとの意味は、おそらくフランス植民地時代にすでにあった、村と郡のあいだの行政単位であり、その行政をつかさどる役職名である。地域つまり複数の村落をまたいで行政手腕を発揮し、また、フランス軍との関係もあったので、相応に強い権力を保持した役職であった。この村はまた、タイ・ルー独自の汎地域的な政治組織ともかわりをもっていたとされる。この村よりさらに中国国境側にあるタイ・ルーの村にいたチャオ・ムワン<sup>4</sup>と呼ばれる権力者の統治のもとに、長い期間を過ごしたといわれている。

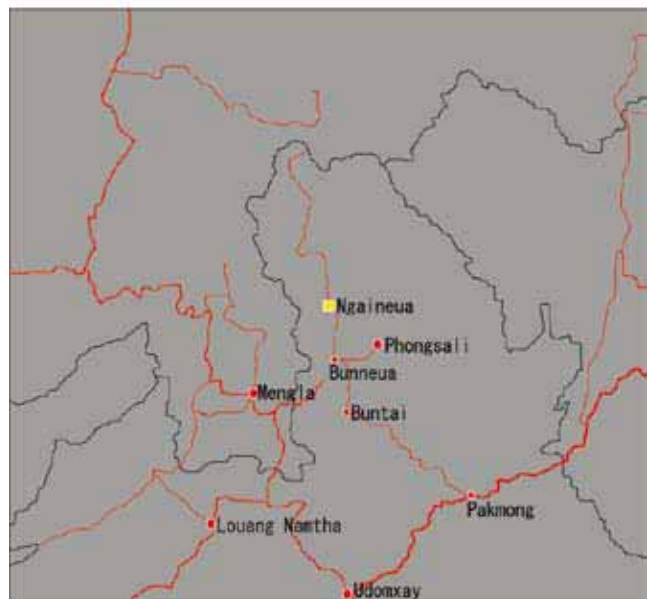


図 1：村落の位置図

そのほかにこの村には、ラオスの諸村と同様の政治組織があるが、特筆すべき活動をおこなっているのは、老人を中心に構成されるプー・ワタナタムと呼ばれる知識者集団である。この集団は、タイ・ルーのいわゆる伝統文化にかかわる諸活動を中心となっておこなう。たとえば各種儀礼において、適切な指示を儀礼の遂行者に与える。この村には、村落の創設にかかわり、タイ・ルーの慣習的な規則や慣行、慣習法などが記されている文書が現存する。プー・ワタナタムは、その文書の内容に即して村人の生活を律するという側面も持っている。また、知識者集団に関しては、寺院で修行僧に教育をほどこすアチャーンと呼ばれる老人たちも数名いる。これらアチャーンが、寺院の内部で若い修行僧にタイ・ルーの文字や読経の方法を教える光景は頻繁にみられる。

### 3. 村の歴史語り

#### 1 ] ホーからの避難

ここでは、調査で知りえた限りの村の歴史を概観する。また、ふたつの世界大戦やその後の国内の動乱、政治体制の変化にどのように向き合ったのかをひとりの老人の語りから再構成していく。

インフォーマントとなったのは M 氏(男性、85 歳)である。かつて村長をつとめたことがあり、くわえてタイ・ルーの慣習や村の歴史に関して卓越した知識を持っているとされる人物である。

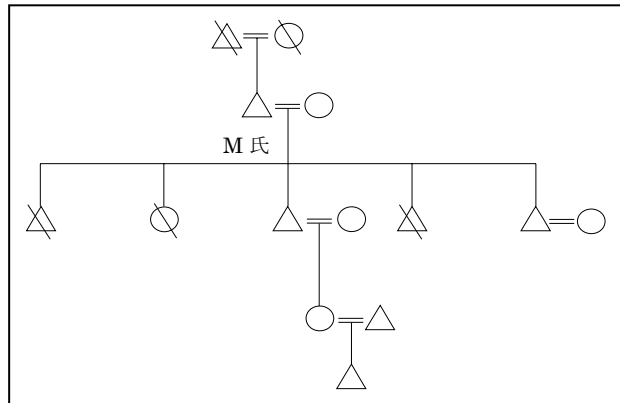


図 2 : M 氏の世帯構成

この村の来歴を聞くと、多くの村人は、およそ 200 年から 280 年くらい前にできたと答える。その根拠となるのは、先に触れた文書がおよそ 280 年前に書かれたものだとの言い伝えがあるからである。しかし、それを裏付ける明確な証拠は存在しない。

こうした、村の創建にかかわりながらも事実関係が不明のままであり、確認する手立てがないような事象に関して、なかば慣習的な答えかたのモードが存在するのはこの村に限ったことではないだろう。いわば、神話の語りともいえるべきこうした現象を本報告では否定しない。ただし、ここでは、より近い過去についてその事実関係を知る M 氏の語りから、この村の来歴をたどってみたい。

M 氏の現年齢から逆算すると、M 氏が生まれたのは 1920 年である。M 氏の父親は 30 年前に 86 歳で亡くなったというから、父親の生年は 1889 年、没年は 1975 年である。この父親の生年以前からンガイ・ヌア村はあったという。少なくとも 1889 年にはこの村は存在していたことになる。この 1889 年という年号が、今回の調査で村の来歴に関して確認しうるもっとも古い年であった。

M 氏の父親が生まれる以前に、おおきな出来事が村人を見舞った。中国から越境したホー人の攻撃からの避難である。これは、ラオスの国家としての歴史においても重大な事件である。武装したホーの一団がヴィエンチャンまで攻め入ったことが、数々の文献に記録されている [上東 1990: 81-83]<sup>5</sup>。当時、ンガイ・ヌアの村人は、ホーから直接の被害を被ったわけではない。しかし、ホーのこの地域への侵入と通過する先々での襲撃や略奪の噂に恐れを抱き、避難したという。

このときンガイ・ヌアの村人は、いったん中国に入った。そして、ムアン・ラー(モンラー)を經由し、メコン川に沿って南下し、タイのチェン・コン近郊にあったホイ・ルアンという村に行き着いた<sup>6</sup>。M 氏の両親は、このホイ・ルアン村で生まれた。ンガイ・ヌアの人びとはその村で 12 年間を過ごしたという。また、ンガイ・ヌアの近郊にあった別のタイ・ルーの村ポー・タイの村人は、同じような経路でチェン・コンまで行き、ホイ・ルアン村の近郊のホイ・ミンという村に落ち延びたという。

12 年経過した後に、ンガイ・ヌア村に帰還しようというとき、一部の村人は、帰還後の生活に不安を感じていた。そして、帰還途中に通過したルアン・ナムター県にそのままとどまった。この一団がつくった村はナム・トゥンといい、現在でもルアン・ナムターにあるという<sup>7</sup>。

#### 2 ] 大戦をはさんだ時代

このような曲折を経てンガイ・ヌア村に戻った一団に、後に M 氏の父母となる男女がいた。M 氏によれば、父親の結婚年齢は不詳だが、母親は 20 歳のときに M 氏を産んだという。これは、先にも述べたように、1920 年の出来事である。

M 氏は、12 歳から 19 歳まで出家して、村の寺院で過ごした。寺院で暮らし始めたころから、この地域にフランス軍が来るようになった。そして 14 歳になった 1934 年、ひとつの事件がこの村で起きた。当時、ンガイ・ヌア村には 20 世帯が暮らしていた。ある日、フランス軍が村にやって来て、村人になにかの病気の予防注射をほどこすということになった。村人にとっては、白人と接触する最初の機会であったし、列をつくらせて強制的におこなうということで、村人はとても怖がった。27 歳になるひとりの男性の順番になった。この男性は、なにかの病気で発熱していた。椅子に座るように促されたが、行動が遅く、怒ったフランス人に下腹部を蹴られた。M 氏をはじめとする村人の解釈によれば、それが原因でこの男性は急死してしまった。この男性の家族はひどく悲しみ、村を後にして別の村に移住したという。

1939 年、19 歳で還俗した M 氏は、翌年に結婚した。相手は中国のタイ・ルーの女性だった。結婚に先立っていくどか中国まで出かけ、結婚相手を探すンガイ・ヌア村の男性は、当時多かった。M 氏は、妻となった女性の村で結婚式をあげ、その後すぐに、妻をンガイ・ヌア村に連れてきた。家財道具やいわゆる嫁入り道具を馬の背にくくりつけ、数日間かけての旅だった。しかし、このころ、多数のフランス軍が、日本軍との戦闘のために、ンガイ・ヌア村の先にあるニョット・ウー村に駐留していた。これらフランス軍のふるまいは横暴で、ンガイ・ヌアを含む近隣の村々から強制的に食料や家財を供出させていた。M 氏の妻は、こうした村の状況に恐れを抱き、数日間村に滞在しただけで、中国の自分が生まれた村に帰ってしまった。

フランス軍の駐留により、次第に村での生活は困難になっていた。ンガイ・ヌアの村人は、近隣の山地に逃げ込んだ。そこで、トゥープ<sup>8</sup>と呼ばれる小屋を建てて生活するようになった。供出を逃れた少数の家畜、豚、鶏、アヒル、水牛などは、なんとか連れて行くことができた。夜は山地のトゥープで眠り、昼間は男性たちが隠れながらンガイ・ヌアの近くに忍び寄って、村の様子を観察していた。フランス軍は、村人の家々を勝手に使っていた。

そんな生活がしばらく続いた 1941 年 4 月のある日、過失か故意かは不明だがある家から出火し、村全体に延焼して、20 戸ほどのすべての住居が消失してしまった。M 氏らはひどく落胆したが、フランス軍に文句をいうわけにはいかなかった。フランス軍はンガイ・ヌア村に興味を失くし、ブン・ヌア郡に南下していった。この後、M 氏らは、焼けた村と山地の往復を繰り返しながら、村にトゥープを建設するなどして、すこしずつ村での生活を再興していくことになる。

村が全焼してからひと月ほどたったころ、南下したフランス軍は、日本軍に掃討されて再びンガイ・ヌア村にやってきた。その後に日本軍がやって来た。そのとき、多くのフランス軍の兵士が日本軍の捕虜になった。日本兵は、山地の村人の避難場所にも来て、フランス軍がかくまわれていないかを調べた。また、暴力を振るうところそなかったが、40 頭近い水牛や多数の鶏を村人に供出させた。M 氏に限っていえば、馬 3 頭と鞍などを供出させられた。また、鶏を持って来いといわれたので、森にいる野生の鶏を獲る振りをして、そのまま森の奥へと逃げて行ったこともあるという。

フランス軍による村落の消失は 4 月ごろの出来事だったが、それ以降 7、8 月くらいまで、ンガイ・ヌア村の村人は山のトゥープで過ごした。その後、村人は徐々に村に帰還していった。ただし、生活は苦しく、困窮をきわめた。住居を新築する余裕もなかったのも、村でも、各世帯はトゥープを建設した。そのまま 5 年のあいだ、農作業をおこないながら、トゥープでの生活を続けた。そして、村が消失して 6 年目の晩秋、稲刈りの作業が終わったところに、村の半数ほどの世帯（15 世帯前後）が高床の家を新築した。M 氏は、この年、中国の自分の村に帰った妻を迎えに行ったという。

#### 4. 国家とのかかわり

##### 1] 聖なる森

##### (1) 森の意味

ンガイ・ヌア村は、その後 1964 年にふたたび火事に見舞われ、ほぼ全村が消失する<sup>9</sup>。現在のンガイ・ヌア村はしたがってそこから再興された村である。こうしていく度かの事件に見舞われた同村だが、国家とのかかわ





写真 1：村落のダウン・カム（写真右手）

りに関していえばそれほど濃密ではなかったようである<sup>10</sup>。国家が黒船のごとく同村の村人の前に出現するのは、1975 年にラオスが社会主義革命を経て、人民民主共和国となってからのことであった。

M 氏をはじめとするンガイ・ヌア村の人びとによれば、タイ・ルーの村落成立にはいくつかの条件がある。ひとつは、人びとの生活にさまざまな場面で指針を与える寺院である。この寺院に少年僧を修行させたり、寺院の保守管理をおこなったりするために、相応の世帯数がなければならない<sup>11</sup>。また、村落空間の中心を定めることも必要である。これは、カーン・チャイ・パーン<sup>12</sup>と呼ば

れ、通常はおおきな石を置くなどして具現化されている。ンガイ・ヌア村の場合も 1m 程度の石が置かれている。

これにくわえて、ダウン・カムという森を確保しなければならない。ダウンは「おおきな木がある森」、カムは「決められていることを守ること」などと説明される。ンガイ・ヌア村のダウン・カムは村落の後背地に隣接しており、ひとつの小高い山全部がこう呼ばれる。なぜ、このような森が必要とされるのかといえ、この森には村人の祖先や、古くから中国西双版纳の景洪にいとされるタイ・ルーの守護神に相当する超自然的存在 テーワダー<sup>13</sup>と総称される存在 がいると考えられているからである。ンガイ・ヌア村では、これらテーワダーとコミュニケーションできるメー・ティ・ナンと呼ばれる女性がひとりおり、その属性や職能などから考えてシャーマンであると考えられる。彼女は、憑依現象をともしないながら、ダウン・カムにいるテーワダーとの交信をおこなう。M 氏によれば、ダウン・カムのテーワダーは日々村人の生活を見ている。そして村人に伝えたいなんらかの事柄があると、このシャーマンの力を借りて（つまり憑依して）村人にそれを伝えるという。寺院と並んで、人びとの宗教生活の中心でもあるわけであり、毎年の旧暦 10 月のはじめごろに、動物の供犠をともしなう儀礼がこの森の中にある祠でおこなわれる。カム・パーンと称されるこの儀礼では、ポー・モーという役職の男性が中心となり、数十羽の鶏と 2 頭の豚をテーワダーに供犠するという。また、この儀礼がおこなわれる 3 日のあいだは、村落の周囲にターレオと呼ばれる呪漂が立てられ、外部の者が村に入ることは禁止される。

このダウン・カムでの行為は厳密に定められており、森林信仰のような側面を強く持っている。たとえば、ダウン・カムに進入することは強く忌避されているし、そこでの木材伐採も禁止されている。また、大小便や大声での放吟も禁止されている。森に対する間違った行為は慣習法的罰則の対象ともなっている。くわえて、この森はンガイ・ヌア村の社会構造とも密接な関係を持っていることを見逃してはならない。多くの老人たちがこの社会では尊ばれているのは、卓越した慣習的知識を保持しているからだ、もちろんこのダウン・カムの管理にかかわる知識もそこに含まれる。また、メー・ティ・ナンは神がかりだとしても、モーポーは世襲であり、その宗教的役職者の系譜を長い間保持してきたことがわかっている。

## （２）郡役所とのやり取り

人びとの信仰の中心であるこのダウン・カムを舞台としてある事件が起こったのは 1976 年だった。前年に革命政権が誕生し、全土に社会主義思想が広まった。中央政府からの通達を受けて、ブン・ヌア郡の役人数名が、ンガイ・ヌア村にやって来た。そして、役人たちは、村人にダウン・カムの木を伐採するように命じたのである。精霊信仰を捨てさせるという政府の方針に沿ったものだった。

M 氏によれば、村人にとっては急な話であり、わけもわからずに対応に苦慮したという。村人たちは、断ることもできずにしぶしぶとその命令にしたがったが、内心では恐怖に駆られていたという。しかし、多くの村人が役人とともに森に入らざるをえなかった。村人たちは、ダウン・カムにいるテーワダーからの報復が恐ろしいので、胸のうちで、強制されて仕方なく伐採をすること、自分の本意ではないことなどを必死に唱えたという。

森に入った一行は、つぎつぎと伐採を続けた。そして、役人の命令で、テーワダーをまつ祠の近くにある直径 1m 以上もある木（マイ・ヨーム・ヒーン）も切り倒してしまった。続いて、役人のひとりが祠を蹴り上げて破壊した。すると、奇妙なことがおこった。当の役人が倒れて気を失ってしまったのである。ンガイ・ヌアの村

人たちがばかりではなく、ブン・ヌアから来た役人たちもこれにはおおいに驚いた。自分たちモンガイ・ヌアの村人と同じタイ・ルーである役人たちは、ダウン・カムの意味を熟知しており、それゆえに恐慌をきたしていたという。即刻、伐採は中止され、役人は逃げるように村を後にした。それ以後、郡役所からのダウン・カムに対する干渉はまったくなくなったという。ただし、この出来事の後、3 年間は、ダウン・カムで儀礼はおこなわれなかった。それは、テーワダーの怒りがあったからであるとも、伐採や祠が破壊されたためにテーワダーが不在になったからであるとも説明される。また、ダウン・カム内では伐採された木もかなりあったので、以前のような状態に戻るまでには現在まで続く長い時間が必要だった。

## 2 ] 政府による農業共同体の導入

ダウン・カムでの事件と前後して、ンガイ・ヌアでは、社会主義政府との関係ができつつあった。サハコーン・カセート、いわゆる「共同農業（共同組合）」システムの導入である [ 鈴木 2003: 333 ]<sup>14</sup>。これは、1975 年の人民民主共和国成立後、3 年たった 1978 年から導入され、1983 年まで続いた。結論から先にいえば、このシステムはよい成果につながらなかった。3 年間で終了したことはそれを物語る。ここでは、M 氏の説明をもとにンガイ・ヌアの状況をみてみよう。

村人全員がこのサハコーンへの加入が義務付けられた。まず政府は、家畜や耕作地を個人所有から数世帯から数十世帯ごとの共同所有に切り替えさせた。当時、ンガイ・ヌアには、70 ～ 80 ほどの世帯があった。そこで、村落の周囲に点在する水田の位置にもとづいて 5 つのグループがつくられ、それぞれのグループが共同で水田を所有することになった。このグループはまた、水牛や牛などの大型家畜も共同で所有した。ただし、豚に関しては個人所有のままであった。それでも、各世帯には年間で 30kg ほどの肉の供出が割り当てられた<sup>15</sup>。

このサハコーンでは、個人の労働は点数化されていた。基本は、成人ひとりが 1 日働くと 10 点という具合である。半日の欠席は 5 点、1 日丸ごと欠席すると 0 点である。そして、最終的に個人の合計点数が算出され、その点数に応じて各グループで収穫した米を各世帯に分配するというものであった。

ほどなくして、このシステムには多くの不満が寄せられた。そのひとつは、米の収穫物の分配をめぐるものだった。世帯内に労働人員が多いほど、たくさんの米が分配される。逆に、労働人員が少ない世帯は、十分な量の米を分配してもらえない。1 年間、世帯で食べるに十分な分ももらえないという世帯が多数出るようになった。そうした世帯から不満が広がっていった。

また、共同作業でおこなうために、どうしても世帯単位で育成していたころのような、きめの細かい作業ができないう問題もあった。たとえば、それまでのように早稲、晩生といった植え分けをおこなうようなことはなくなった。そのために稲はよく育たず、収穫量は少なくなっていった。また、村人同士で喧嘩や誹謗、中傷もたびたびおこるようになった。だれが仕事をサボった、そのせいでだれの米の分配量が減るといった口論がたびたびおこるようになった。

こうしたもろもろの問題をかかえて、ついに 3 年目には、ほとんどの世帯に、1 年間十分に食べるに足る米を配分することができなくなった。そのために、当初のサハコーンは、1980 年をもって終わりを迎える。その後、3 年間は試行錯誤の期間である。当初おこなった、もともと所有する水田の場所にくるといような共同性の根拠の曖昧な分け方ではなく、親族関係や親戚にあたる者同士がグループをつくったり、それとは逆に機械的に 10 世帯をまとめたりというように、いろいろな方策が試された。しかし、どれも生産性があがらず、結局、ンガイ・ヌアのサハコーンは 1983 年で放棄されることになった。その後、共有化された水田は各世帯の所有に戻っていった。しかし、家畜の場合は事情が違った。たとえば M 氏の世帯では、水牛 5 頭、牛 12 頭を共同所有に供していたが、結局返却されたのは水牛、牛とも 1 頭ずつのみであった。サハコーン解体後に、水牛を所有していない世帯に配分されたという。

## 5 . まとめと今後の課題

たとえば隣国タイの様態と比べると、国家としてのラオスと周縁諸社会との関係は固定されておらず、現在にいたるまで揺れ動いていることが顕著である。タイが前世紀に国民国家への道筋を歩み、その歩調に合わせて周縁社会がタイ社会に同化し、または統合されていったことと比較すると、ラオスではそうした関係性が弱いこと

が際立つように思える。こうした状況を国力の差という表現や経済的指標のみでまとめてしまうのは適当ではない。たしかにラオスが多民族国家であること、国境の持つ意味が近年まで脆弱だったこと、急峻な山地が中央政府の周縁への介入を阻んできたことなど、ラオスという国家の地理的、社会的なさまざまな特性が、そうした状況に重層化して関係してはいる。しかし、ラオスにおける国家と周縁社会の動的な関係は、そうした国家の側の事情というよりも、周縁諸社会の人びとの側に求めるべきと思われる。国家という枠組みのなかで想像しがちな周縁の脆弱さやはかなさというものもたしかにあるけれど、周縁にいるからこそ、人びとは独自の歩みをしてきたのではないか。それを可能にしたのは、国家という枠組みとは異なる論理でなされたであろう個人の行為であり、その舞台となった生態環境をもとに組織された村落社会である。このようにとらえることで、本報告が下敷きとした「叛史」の概念に近づくことができるのではないだろうか。

#### 参考文献

クラストル, P.

1987 『国家に抗する社会 政治人類学研究』渡辺公三訳 水声社。

上東輝夫

1990 『ラオスの歴史』同文館出版。

鈴木雅久

2003 「12 章農業」『ラオス概説』ラオス文化研究所編, pp.325-359, めこん。

豊浦志朗

1989 『叛アメリカ史 隔離区からの風の証言』筑摩書房。

#### 注

- 1 本報告の下敷きとなった調査では、ラオス在住の調査コーディネーター、トンワン・テップカイソン氏から多大な協力を得た。また、本報告で使う調査資料の多くは、テップカイソン氏と共同で収集したものである。
- 2 村の建設時、最初に建立されたという。
- 3 在来品種は味がよく、酒づくりや家畜の飼料として価値があった。しかし、茎の背が高いため風にあたると倒れやすいという欠点があった。新品種は、背が低く、こうした欠点は克服されているという。
- 4 直訳すれば、「町の所有者」となる。
- 5 ホーの襲撃は 1872 年から約 15 年間、断続的にあった。
- 6 避難したのは旧暦 12 月で、主食である米の収穫後であったが、脱穀する前にすべて捨て置いて逃げたという。
- 7 ホイ・ミンに避難したボー・タイ村の一団もまた、ボー・タイに帰還せずにルアン・ナムターにとどまり、タファーという村をつくったという。
- 8 現在のンガイ・ヌア村にも、こうしたトゥーブと呼ばれる住居がある。生活面全体を地面の上に直接もうける、いわゆる地床式の住居である。
- 9 ある世帯で留守番をしていた子供が食事をつくろうとして失火したという。
- 10 現在のラオスが成立する過程で、この報告書が対象にするようないわゆる少数民族がどのような位置づけをされていたのか、またその位置づけがどのように変化したのかは精査しなければならない。今後の課題としたい。
- 11 ンガイ・ヌア村では 15 世帯程度という話が聞かれた。
- 12 直訳すれば、「中心・心・村」となる。
- 13 テーワダーに対する説明は多岐にわたる。「ピー・バーン(村の霊)」や「村全体のテーワダー」という表現もある。現在のところ、テーワダーと総称される超自然的存在の詳細を述べるだけの資料は集めていない。この存在は、ダウン・カムにもいとされるが、各世帯の住居のなかにもこの存在をまつる祭壇のようなものがある。
- 14 鈴木によれば、旧ソ連のコルホーズと同様の形態で組織されたこのシステムは、全国的には、1975 年からチンタナカーン・マイ(新思考)政策により諸所が刷新される 1986 年まで継続した[鈴木 2003: 333]

15 供出された肉は、政府関係者や郡の役人が来訪したさいに、まかないとして出されたという。

### Summary

This report is based on the research which was conducted last year in a Tai Lue village of Boon Neua district, Phong Sali prefecture. The contents are the descriptions mainly focusing on following two points; first, an abstract of the village history until the present, second, how an individual or a minority group society dealt with living space including ecological environment. As a method of the description on complicated historical events and personal experience, narratives talked by villagers will be used in this report. Furthermore, how people faced a nation or other minority group under the peripheral situation in recent years will be described in a sense of rebellious history.